
特 集 これからの遺伝診療を考える

【巻頭言】

安 友 康 二 (徳島大学大学院医歯薬学研究部生体防御医学分野)
苛 原 稔 (徳島大学大学院医歯薬学研究部産科婦人科学分野)

遺伝診療は、従来はまれな特別の家系だけが関係する疾患を取り扱う狭い範囲の医療と考えられてきた。しかし、最近の遺伝子検査技術の進歩により、すでにヒトの全ての遺伝子配列が決定され、また少量の非侵襲的な検体（血液や唾液など）で遺伝子の検査が可能となり、市販の遺伝子検査も行われるようになってきた現状においては、すべての医療分野に関係し、医療者が知識として習得しておかねばならない、一般的な医療になりつつある。

一方、遺伝子の全てを検査できる現在、その技術をどのように応用するかが極めて遅れている現状がある。遺伝子的に変異があることと病的な異常とは同一なのか、異常は確率論と並行するがどのように出現頻度を考えるのか、異常を簡単に排除する社会が本当に正しいのか、さらに遺伝子を調べる上でわれわれが考えなければならない倫理的、社会的な指摘をどう扱うのか、臨床応用における問題は山積している。すなわち、検査技術は進歩により遺伝診療は図体が大きくなったが、その患者への応用方法には未熟なまにある。

遺伝診療で特に重要なのは、適切なカウンセリングとともに適切な診療を行うことであり、あらゆる診療領域での適切な遺伝の知識（カウンセリングを含めて）が必要となっている。そのためには、早急に遺伝専門医や遺伝カウンセラーの遺伝診療を支える医療人の育成を図る体制の整備が必要である。さらに、遺伝診療を円滑に行うためには、適切な施設の整備を整える必要がある。その施設は、多くの診療科に専門医がいて遺伝診療に参加でき、倫理面での検討が可能で、個人情報情報を正確に安全に管理できる条件が満たされなければならない。徳島県でもこのような施設を整備して遺伝診療体制を早期に構築する必要がある。

幸い、徳島大学には人類遺伝学会の専門医養成施設であり、遺伝診療のエキスパートが揃っている。そこで、本シンポジウムでは基調講演として、井本逸勢教授から遺伝診療の基本知識、現状とこれからの展望を概説していただき、小児、外科、耳鼻咽喉科、産科婦人科の各診療科からそれぞれの領域のトピックスを報告していただくことにした。